

2 北京大学与日本研究

—王学珍主任在中日共同研诂会上的讲演

王 学 珍

(一)

中日两国邻邦一衣带水，中日两国文化交流源远流长。阿倍仲麻吕入唐为官、鑑真和尚东渡扶桑传经等等中日文化交流史上久远的佳话，至今为中日两国人民所赞颂和珍视。近代以来，由于西方文化的东来，使中日两国历代文化交流的情况发生了变化。特别是1868年明治维新以后，日本从过去主要从汉译西洋文化吸取营养的作法，改为主要由自己直接输入和吸取西洋文化，它学习西方，改变国体，民日富、国日强，经过二十多年的改革发展，使它能在1894年甲午战争中打败了天朝大国。在这场战争中，清政府经营多年的北洋水师一败涂地，中国洋务运动的致命弱点暴露无遗。一向被中国视为“蕞尔小邦”的日本，一举打败了自尊自大的天朝大国，这使中国人特别是中国知识分子受到极大的刺激和震动。从而使他们由于鸦片战争的刺激而研究西方，转到由于甲午战争的刺激而研究日本。

人们发现，在19世纪中叶以前，即明治维新以前，日本的社会状况与中国的社会状况差不多。如两国都是以自给自足的小农经济为基础，都采取了闭关自守的对外政策等等。而明治维新以后，却情况大变、强弱悬殊了。1895年、胡燏棻在《变法自强疏》中说：“日本一弹丸岛国耳、自明治维新以来，力行西法，亦仅三十余年，而其工作之巧，出产之多，矿政、邮政、商政之兴旺，国岁入租赋共约八千余万元，此以西法致富之明效也；其征兵宪兵，预备后备之军，总计不过十数万人，快艇雷艇总计不过二十余号，而水陆各军，皆能同心协力，晓畅戎机，此又以西法致强之明效也。”胡燏棻的看法具有代表性。按照这种意见日本是学习西法致富致强的样板，我们学习西法也应仿效日本。因而一时间，日本就成了中国学习、研究的主要对象。在这种情况下，又有人提出：“近者日本胜我，亦非其将相兵士能胜我也，其国遍设学校，才艺足用，实能胜我也。”（《康有为政论集》上）呼吁仿照日本设立新式学校。

学习研究日本的成果之一，便是京师大学堂的建立。京师大学堂便是当今北京大学的前身，成立于1898年。开设之前和开设之初，大学堂总教习吴汝纶、后任暂行管理大学堂事务大臣的许景澄等多名京师大学堂教职员曾赴日本考察学务，研究教育新法、首任管学大臣孙家鼎所奏拟《大学堂章程》也是“大都参酌东西洋各国学校制度……间有变通之处，缕析条分”为光绪皇帝批准实施的。

(二)

京师大学堂作为戊戌变法的遗存，自与中国的旧式书院不同。它是按现代意义上的大学的模式创办的，特别是1902年（光绪二十八年）经张百熙恢复重建之后，更是如此，当时，大学堂的课程设置除各项专业功课如算学、地理学、农学、矿学、文学等等外，还开设有英、法、俄、德、日五国语言文字学课程，任学生自由选习，但其中“日语则须人人皆学”。当时称日文为东文，曾聘请不少来自日本的教习任教，因而东文教习的人数也就最多。1902年（光绪二十八年）至1908年（光绪三十四年）间，共有35人任东文教习，几乎是英、法、俄、德四种西文教习38人的总和，1906年同时在校任课的东文教习专职兼职总计达24人之多。如服部宇之吉、巖谷孙藏、杉荣三郎等日本学者都曾先后在大学堂专任或兼任东文教习，可见当时京师大学堂学习日文、研究日本的积极性和热情是相当高的。为了进一步学习、研究日本新的法制国体及各科教学，并培养中国师资以扩大新式学堂，1904年初、京师大学堂还派遣余燊昌、馮祖荀等31名学生赴日本

游学。这批留学生中有不少人于1909年前后回国，任教于京师大学堂，为中国的高等学校开设了一批新课程。如余燊昌教的法政学，馮祖荀教的数学等。

1911年，辛亥革命之后，京师大学堂于1912年5月改称北京大学。此后，北大师生不断赴日考察研究，许多学系都曾组团赴日，学校也曾于1920年组织了以高一涵教授为首的北京大学游日团赴日。当时所关心的主要是，大学学制及课程、图书馆及实验设备、地质教学及野外地质、学生活动、青年思潮、出版事业、慈善事业、马克思主义及社会主义运动状况、法院及监狱状况、海陆军要塞社会状况、硫酸工业、酿造工业、化学工业、化学工艺及标本、日本地震状况、东西京大阪及各城市经济状况、中日贸易之趋势等等。除北大师生赴日本考察研究外，还邀请日本学者如东京商科大学教授福田德三博士、早稻田大学片上伸教授等来北大讲学，并与帝国大学、早稻田大学的学生进行交流。这种情况持续到二十世纪三十年代初。

1931年日军发动“9·18”事变后，北京大学学生会成立了“北大学生抗日运动委员会”“北大东北同学抗日救国会”等组织。部分北大师生鉴于国际形势的急剧变化，认为1936年将爆发世界危机，特于1934年3月2日组织成立了“一九三六研究会”，研究有关国际形势的发展及中国应如何应付未来之大事变。北京大学一九三六研究会研究计划书中列入的研究对象有大不列颠系、美利坚系、苏联系、日本系、欧洲大陆系、中国系等，并于每系之中对其国内阶级状况、各帝国主义之间的矛盾状况、帝国主义与殖民地之冲突状况、各国经济发展状况、军事工业状况、对内对外关系状况等等分类进行研究。这大概是北京大学对日本的政治、经济、军事、外交等进行有组织、有计划研究的开端。而日语教学自1902年开设东文（日文）课程之后，一直未间断过。二十年代中，日语还从外语系中分出来单独成立了东方文学系招收日语专业学生，可以说北大在日语人才的培养方面在全国一直居于领先地位。但总的说来，这一阶段北大的日本研究主要是用什么学什么研究什么，比较零星，有很大的随机性。

(三)

本世纪三十年代，日本军国主义猖獗，大肆对外侵略扩张，给中国人民和东南亚各国人民造成巨大苦难，迫使中国人民进行了长期的抗日战争，由此引起中国人民对日本的恶感。由于这个原因，也由于抗日战争爆发后学校实际条件的限制，以及此后中日两国政治形势的变化等原因，直到1949年中华人民共和国成立，北京大学的日本研究，除日本史的一些研究外，基本上处于停顿状态。不过日语的教学在北大是一直持续着的，就是在西南联大时期，外语系仍设有日语，1946年北京大学迁回北京建立东语系时，日语仍是东语系中一个主要语种。

(四)

1949年中华人民共和国成立后，由于党和国家的关怀和重视，北京大学得到迅速的发展，北京大学的日语教学和对日本的研究也得到了迅速的发展。北大东语系的日语专业招生人数增加很多，师生力量也得到了很大加强。由于它是中国高校最早成立的日语专业，所以它的毕业生自然而然地成为五、六十年代新成立的中国外交学院、北京外国语学院、国际关系学院、上海外国语学院及以后成立的中国社会科学院日本研究所等一批高校日语教学和科研机构的骨干。相应的北大日语的专业教材，如陈信德的《现代日本语实用语法》、《科技日语自修读本》、《译

注科技日语自修文选》，刘振瀛的《日本文学史》、《日本文语语法》等等也成为五六十年代全国高校的统一教材或主要参考书、有的直到现在仍是主要的参考书。与此同时，对日本其他方面的研究也逐步开展起来，出版了许多有影响的著作。如邵循正教授的《中日战争》、“二千年来中日人友好关系”，阴法鲁教授的《从音乐和戏曲上看中国和日本的文化关系》，朱谦之教授的《日本哲学史》、《日本的古学及阳明学》、“朱舜水与日本”，周一良教授的“鑑真东渡与中日文化交流”等等。不幸的是，这种良好的发展势实，因“文化大革命”的发生而受到很大挫折。

(五)

二十世纪八十年代，随着中国改革开放政策的实施，中国人民看到了中国与世界发达国家的差距，迫切希望了解世界，研究并学习发达国家先进的科学技术与经验，其中，东邻日本的经济腾飞、再次引起了中国人民学习、研究的注意。在这种情况下，北京大学的对外交流也日益增多，对外国的研究日益发展，特别是对日本的研究再次蓬勃发展起来。参与研究的人员和研究的范围都大大地扩大了。

据不完全统计，从80年代初到现在，北京大学有近百人分别参加过对日本的社会、历史、文化、教育、艺术、政治、经济、法律、哲学、科技、民俗风情、国民性格等的研究，并取得了可喜的成果。例如在日语教学方面出版的教材和教学参考书有《简明日语句法》、《日语基础》《日语句法研究》、《大学日语》、《现代日语敬语用法》、《当代日语教程》、《日语中谓语的附加成份与汉语》、《基础日语学习辞典》等等 在日本教育研究方面已发表的有《日本的文教措施》、《日本高等教育改革的背景及政策》、《日本战后最大的一次高等教育改革》、《战后的日本教育》、《日本的第三次教育改革》等等；在日本文学研究方面发表的著作更多，如《日本推理小说与清代考据之学》、《日本中世纪时代女性文学的繁荣及中国文学的影响》、《日本文学论集》《日本近现代文学阅读与鉴赏》等等都是水准较高的成果、关于日本科学技术方面的研究，则有《日本人的科学创造性刍议》、《日本的科学技术政策》、《日本是如何振兴信息产业的》等等论著和译著发表。

为了统一协调学校各系各研究机构对日本的研究，更好地组织研究力量，从而更有成效地开展研究工作，北大于1988年4月22日成立了“北京大学日本研究中心”。该中心是一个跨学科的綜合性的日本研究机构。它自成立以来，在加强和促进北京大学日本研究，开展校内外、国内外特别是中日两国学术界的交流与合作等方面作了大量工作。它曾单独以及与北大经济学院联合举办了现代日本研究班、开办了日本文化系列讲座及其他科目的众多讲座，召开了中日民俗比较学术研讨会等多种学术研究及交流活动，并编辑出版有《日本研究丛书》与《日本学》等论文集和《中国日本学论著索引》、《北京大学图书馆藏日本版古籍目录》等工具书。在日本研究中心的推动下，北京大学的日本研究得到了更迅速的发展，取得了更瞩目的成果。据统计，自1988年日本研究中心成立至1993年，中心成员共完成科研项目近300项，已发表论著、译著287项。这287项中有专著36部、译著29部、论文185篇、译文35篇、它们涉及日本的历史、文化、教育、政治、经济、法律、哲学、社会、语言、文学、科技等等学科及工具书等。这些成果充分显示了北京大学学科门类比较齐全的优势。1994年和1995年的科研成果统计尚未完成，估计都

将超过 1988 至 1993 年的年平均数。这还不包括北大教授所带研究生每年完成的有关日本研究的数量不小的博士论文和硕士论文。另外，中日两国学者合作的《日中文化交流丛书》整套十卷本，第一卷（历史卷）已于 1995 年由日本大修馆书店出版，是由大庭修（日）、王晓秋（中）主编的。丛书中方总主编为北京大学著名历史学教授周一良。据悉十卷中有五卷的中方主编由北京大学学者担任。

在日本研究中心的组织下，不仅历史悠久、师资力量雄厚、名家众多的历史、哲学、语言、文学等专业的学者参与日本研究，而且国际政治、国际经济、高等教育等后起学科也投入力量进行日本研究。目前北京大学已有一支包含众多学科的力量相当雄厚的日本研究队伍，而且这支队伍还在继续发展壮大。

北京大学的日本研究，不仅有着悠久的历史，而且在新的改革开放形势下得到了很大发展。虽然如此，但还是不能适应形势发展对我们提出的要求。这次中日共同研讨会在北大召开，对我校的日本研究定将起到很好的促进作用。我们相信，在领导的关怀和国内外有关单位和朋友们的支持帮助下，北京大学的日本研究一定会得到新的进一步的发展。

（王学珍、郭建荣撰写）

主要参考文献

- [1] 王学珍郭建荣《北京大学史料》第一卷、北京大学出版社、1993
- [2] 王学珍郭建荣《北京大学史料》第二卷、北京大学出版社、待出版
- [3] 北京大学日本研究中心《北京大学日本研究中心科研成果目录》（1988~1993）、1993
- [4] 北京大学日本研究中心《北京大学日本学论著索引》、1993
- [5] 北京大学日本研究中心《日本学》第二、四、五辑、北京大学出版社、1990~1995
- [6] 贾惠萱沈仁安《中日民俗的异同和交流》、北京大学出版社、1993
- [7] 《北京外国语学院日本研究中心第二回日本学中日研讨会论文集》、1991
- [8] 马兴国崔新京《中国的日本研究杂志历史回顾与展望》、辽宁大学出版社、1995

北京大学の日本研究について

—王学珍主任による日中共同研究討論会での講演

(一)

日中両国は一衣帯水の隣国であり、その文化交流には長い歴史があります。阿倍仲麻呂は遣唐使の一員として入唐し、唐で官位を得ました。また鑑真和尚は東渡して扶桑の国（日本）に正しい仏教の教えを伝えたのです。これ等の日中文化交流史上の美談は現在まで両国の国民に称賛され大事にされてきました。ところが、近代になって。西洋の文明が東にやってきたことにより、それまでの日中両国の文化交流に対する状況は変化を見せ始めたのです。特に1868年の明治維新の後、日本は今まで主流としてきた漢訳された西洋文明のエッセンスを取り入れるという方法から、西洋文明そのものを直接取り込む方法に改めました。そして、日本は西洋に学ぶことで、国の制度を改め、国民は日増しに豊かになり、国もまた日増しに強くなり、この20数年の改革の進展を受け、ついには1894年の日清戦争でわが清朝を打ち破るところまでになりました。この戦争では、清政府が長年に亙り育成してきた北洋海軍でさえ一敗地にまみれ、中国の洋務運動の致命的な弱点が残らず暴露されてしまいました。それまでずっと中国が「弱小国」とみなしてきた日本が、わが清朝の思い上がったプライドを一挙にズタズタにしてしまったのですから、中国人、特に知識人は相当のショックを受けたのでした。それまで彼ら知識人はアヘン戦争の衝撃から西洋に学ぼうとしていましたが、日清戦争のショックで日本を研究する方向に変わったのでした。

19世紀中葉以前、つまり明治維新以前にあっては、日本と中国の社会状況にはそれほど差がないと考えられています。例えば、両国とも自給自足を基本にした小農経済で成り立ち、対外的には鎖国政策を採用している等々の事が挙げられます。しかし、明治維新の後、状況は一変し、日中両国の強弱の差はすっかり開いてしまいました。1895年、胡燏棻は『変法自強疏』の中で「日本は小さな島国であるにすぎない。明治維新以来、努力して西洋を学び、たった30数年で活動は活発になり、例えば出産が増え、鉱山、郵便、商業の制度が整えられ、国庫の歳入の総計は8000万元余りになったのである。これこそが、西洋のやり方で富国に成功したはっきりとした証である。また、徴兵と憲兵、予備役の各軍隊に所属する兵は合計10数万人にすぎず、快速艦や水雷艦も20数隻に過ぎないが、陸海の各軍は皆一致団結し、兵法に精通している。これも西洋のやり方で強国化に成功したはっきりとした証である。」と記しています。胡燏棻の見解は当時を代表するものです。このような考え方には、日本は西洋に学んで富国強兵に成功した見本とし、我々も日本に倣って西洋を学ぼうではないか、という意図がありました。従ってまもなく、日本は中国が学び、研究する主な対象となりました。このような状況の下で、なかには「最近日本が我々に勝ったのは、将官、兵士が我々を負かしたのではなく、日本は全国にくまなく学校を設け、才能と技能を有した人材が輩出したことにより、我々を負かしたのである。」（『康有為政論集』上）と意見を述べ、日本の新式学校に倣う事を呼びかけたのでした。

日本に学ぼうとする成果の一つが、京師大学堂の設立です。京師大学堂は丁度今の北京大学

の前身に当たり、1898年に設立されました。開設の前後に大学堂の総教授呉汝綸、後任の暫定管理大学堂事務大臣の許景澄等の多くの教職員が日本の学制や教育新法の研究と実地調査の為に訪日しました。初代管学大臣孫家鼐が上奏した『大学堂章程』の「おおむね東西各国の学校制度を参照し……いくらか、融通を加えて、詳しくその方途を検討する。」方針は光緒帝の批准を得て実施に移されたのでした。

(二)

京師大学堂は戊戌変法の遺産であり、自ずと中国に古くからある書院とは異なります。京師大学堂は、現代的な意味での大学のモデルケースとして創設されました。特に1902（光緒二十八年）に張百熙恢復会議によって再建されてからは、ますますその意味合いを強めました。当時、大学堂のコースは数学、地理学、農学、鉱山学、文学等々の専門課程のほかに、英、仏、露、独、日の五ヶ国の言語と文字学のコースが設置され、学生の自由な選択に任されていました。ただ、その中でも「日本語は皆が必ず学んでおかなければならないもの」でした。当時は日本語を東文といい、日本から招いた教員も少なくありませんでしたので、東文課程の教員の数はもっとも多人数になりました。1902年（光緒二十八年）から1908年（光緒三十四年）の間に、東文教授は合計35人在籍しましたが、これは殆ど英、仏、露、独の他の西文教授の合計38人と肩を並べるものでありました。1906年においては、東文課程に在籍した教授（専任・兼任を問わない）の総計は24人にもおぼりました。例えば、服部宇之吉、巖谷孫藏、杉栄三郎等の日本の学者が相前後して大学堂の東文課に専任・兼任の教授として在籍しておられた所からも、当時の京師大学堂の日本語学習や日本に対する研究の積極性と熱心さが相当高かったことがお判りになると思います。そして、日本の新しい法律制度や国家制度や各科目教育についてさらに深く学び、また研究し、併せて新式学堂を拡張するための中国人教員の養成を目的として、1904年の初め、京師大学堂はさらに余燦昌、馮祖荀等31名の学生を日本留学に派遣しました。この一群の留学生の多くは1909年前後に帰国し、京師大学堂の教員になり、中国の高等教育機関において一連の新課程を開設しました。例えば、余燦昌の法政学を、馮祖荀の数学等がそれです。

1911年の辛亥革命の後、京師大学堂は1912年5月に北京大学とその名を改めました。この後、北京大学の教師、学生は絶え間なく、調査研究のために日本へ赴き、多くの学部が訪日団を組織しました。大学自体もまた1920年に高一涵教授を団長とする北京大学訪日団を派遣しました。当時の主な関心といえば、大学の学制及び課程、図書館や実験設備、地質学の教育や野外の土壤、学生活動、青年の思想、出版事業、慈善事業、マルクス主義及び社会主義運動の状況、裁判所と監獄の現状、陸海軍の要塞、社会の状態、硫酸工業、醸造工業、化学工業、化学工業と標本、日本の地震の状況、東京・京都・大阪及び各大都市の経済の状況、日中貿易の趨勢等々にありました。北京大学の教師学生の訪日調査研究の他に、さらに日本の学者、例えば東京商科大学教授福田徳三博士、早稲田大学の片上伸教授らを招いて、北京大学で講義をしていただき、併せて、帝国大学、早稲田大学の学生とも交流を深めました。こうした状態は二十世紀の三十年代初めまで続きました。

1931年の満州事変勃発の後、北京大学の学生会は「北大学生抗日運動委員会」「北大東北学生抗日救国会」等の組織を結成しました。北京大学の教師や学生の一部には、国際情勢の急激な変化を目の当たりにして、1936年に世界の危機が到来すると考える者もいました。彼らは特に、1934年3月2日に「一九三六研究会」を結成し、国際情勢の変化と来るべき大異変に対し我が中国が如何に対処しなければならないかを研究していました。北京大学一九三六研究会での研究計画書の研究対象には、大英帝国、アメリカ、ソ連、日本、欧州大陸、中国等の項目があり、各項目毎にその国内の階級状態、帝国主義諸国間の矛盾、帝国主義と植民地の衝突状況、各国の経済発展、軍事工業、対内外関係の状況等々をそれぞれ研究していました。これがおそらく、北京大学が日本の政治、経済、軍事、外交に対して組織的にまた計画的に研究を行ったはしりであろうと考えられます。また日本語教育の方では、1902年の東文（日文）コースの開設の後、それが途絶えることはありませんでした。二十年代の半ば、日本語は外国語系から分かれ、東文学系を形成し、単独で日本語専攻学生を募集していました。北京大学は日本語の人材を養成することにかけては、一貫して全国トップクラスに立っていたといえるでしょう。ただ、総じて言えば、この段階の北京大学の日本研究は主として、何を使って、何を学んで、何を研究するかについては、比較的断片的なものに留まり、行き当たりばったりの側面が強いものとなっていました。

(三)

本世紀の三十年代には日本の軍国主義が猛威を振るい、ほしいままに對外侵略、拡張を行い、中国や東南アジア諸国の人々に対して大きな苦難をもたらしました。そのため、中国人民は長期的な抗日戦争を遂行せざるを得なくなり、これによって中国人民の日本に対する嫌悪感が引き起こされたのでした。このため、そして抗日戦争発生後に学校が受けた実際的な諸条件の制約、さらにはその後、日中両国の政治情勢の変化等により、1949年の中華人民共和国の成立まで、北京大学の日本研究は、日本史の幾つかの研究を除けば、停滞した状況に留め置かれていました。しかし、北京大学での日本語教育は一貫して続いており、西南連合大学の時期でさえも、外国語学部には日本語専攻が設置されていました。1946年に北京大学が北京に戻り、東語学部が創られた時にも、日本語はなお東語学部の一つの柱でありました。

(四)

1949年の中華人民共和国の成立の後、党と国家の配慮や重視により、北京大学は急速な発展を遂げ、北京大学の日本語教育と日本研究もまた急速な発展を遂げました。北京大学東語学部の日本語専攻の募集学生数は大変増加し、教授や学生の力も大いに向上しました。北京大学日本語専攻は、中国の大学のうち最も早く成立した経緯を持つため、この卒業生は自然と五・六十年代に新たに創立された中国外交学院、北京外国語学院、国際関係学院、上海外国語学院やそれ以降に創られた中国社会科学院日本研究所等の一連の大学レベルの日本語教育と研究機関の中心メンバーとなりました。それに伴い、北京大学での日本語専攻で用いられた教材、例えば陳信徳の『現代日本語実用語法』『科技日語修読本』『訳注科技日語自修文選』、劉振瀛

の『日本文学史』『日本文語語法』等は、五・六十年代の全国の高等教育機関で統一教材、或いは主要参考書となり、なかには現在に至るまで主な参考書として使われているものもあります。これと同時に、日本の他の方面に対する研究も次第に発展し始め、多くの影響を与えた著作が世に問われました。邵循正教授の『中日戦争』『二千年來の日中友好關係』、陰法魯教授の『從音樂和戲曲史上看中国和日本文化關係』、朱謙之教授の『日本哲学史』『日本の古学及陽明学』『朱舜水と日本』、周一良教授の『鑑真東渡と中日文化交流』等々の著作がそれであります。ただ不幸にして、このような良好な発展の勢いは、「文化大革命」の発生により大きな挫折を受けたのでした。

(五)

二十世紀も八十年代になると、中国の改革開放政策が実施されまして、中国の人民も自国と世界の先進国との差を認識するようになり、もっと世界のことを知りたいと願うようになりました。そして、先進国の科学技術や経験を学習と研究をするうちに、その中でも東隣の国である日本経済の飛躍ぶりを見て、再び中国人民に日本を学び研究しようとする意欲がわいてきたのでした。こういう背景の下で、北京大学の対外交流もまた日増しに活発になり、外国の研究も次第に発展し、特に日本に対する研究は再び盛んになりはじめました。研究に与る人員と研究の範囲も大いに拡大されました。

完全な統計ではありませんが、80年代の初めから今までに、北京大学には百人近い数の人がそれぞれ、日本の社会、歴史、文化、教育、芸術、政治、経済、法律、哲学、科学技術、民俗風情、国民性等々の研究に従事し、すばらしい成果を達成しています。例えば、日本語教育方面での教材と参考書では『簡明日語句法』『日語基礎』『日語句法研究』『大学日語』『現代日語敬語用法』『当代日語教程』『日語中謂語的附加成分与漢訳』『基礎日語學習辞典』等々が出版されました。日本の教育に対する研究では既に『日本文教措置』『日本高等教育改革の背景及政策』『日本戦後最大的一次高等教育改革』『戦後的日本教育』『日本の第三次教育改革』等々が発表されております。日本文学研究の方面で世に問われた著作は更に多く、例えば『日本推理小説与清代考据之学』『日本中世紀時代女性文学の繁榮及中国文学の影響』『日本文学論集』『日本近現代文学閱讀与鑑賞』等々の比較的レベルの高い研究が出ています。日本の科学技術力面の研究では、『日本人的科学創造性芻議』『日本の科学技術政策』『日本是如何振興信息産業的』等々著述や訳本の類が発表されています。

大学の各学部や研究機関の日本研究を統一、調整して、研究のレベルを高め、更に効果的に研究活動を展開するために、北京大学は1988年4月22日に「北京大学日本研究センター」を設立しました。このセンターは、各学部を横断する総合的な日本研究機関です。設立以来、北京大学の日本研究の強化、促進、学校の内外、国の内外、特に日中両国の学界の交流と協力等々の方面で、多くの活動を行っています。センターは単独で、或いは北京大学経済学院と現代日本研究班を共催したり、日本文化シリーズやその他多くの科目の講座を開設したり、日中民俗比較学術討論会を開催したりと、多岐にわたる学術研究や交流活動を行ってきました。それに平行して、『日本研究叢書』と『日本学』等の論文集や、『中国日本学論著索引』『北京大学図

『書館蔵日本版古籍目録』等の工具書も編集及び出版をしています。日本研究センターのイニシアチブの下で、北京大学の日本研究は急速な発展を遂げ、さらに実り多い成果を挙げることが出来ました。統計によると、1988年の日本研究センターの設立から1993年までに、センターのメンバーは項目にして約300、既発表の著述、訳本は287（内専門書36、訳本29、論文185、訳文35）にもものぼる成果を挙げました。それらは、日本の歴史、文化、教育、政治、経済、法律、哲学、社会、言語、文学、科学技術等々の多くの学問分野や工具書にまで及んでいます。これらの成果は各学部が比較的そろっているという北京大学の優位性をよく示しております。1994年と1995年の科学研究の成果の統計はまだ出来ていませんが、共に1988年から1993年までの年平均数を越えるだろうと推定されています。さらに上記の統計には、北京大学教授の受け持っている研究生が毎年提出する日本関連の修士や博士学位の論文（決して少なくない数ですが）は含まれておりません。このほか、日中両国の学者が共同編集した『日中文化交流叢書』十巻セットのうち、第一巻の「歴史巻」は既に1995年に日本の大修館書店から大庭修（日）、王晓秋（中）両氏の主編により出版されました。この叢書の中国側の総主編は北京大学の著名な歴史学者であります周一良教授が務めています。私の知るところでは、十巻中の五巻分の中国側の主編を、北京大学の学者が担当します。

日本研究センターの組織においては、長い歴史をもち、優秀なスタッフを有し、多数の大家が歴史、哲学、言語、文学等の専門分野の学者として日本研究に参加するばかりでなく、国際政治、国際経済、高等教育等の新しい学問分野でも日本研究に力を入れています。現在、北京大学は、多くの学科からなる相当の力量を持ったスタッフを有しており、なおかつ、それらスタッフは、大きく発展し続けているのです。

北京大学の日本研究は、単に長い歴史を持つだけではなく、新たな改革開放という新たな情勢の下、大いなる発展を遂げるに至りました。とはいっても、社会の発展が我々に求めるものにまだ十分に対応できていません。今回の北京大学での日中共同研究討論会の開催は、北京大学の日本研究に対してのすばらしい促進作用を与えてくれるでしょう。我々は、指導者の配慮と国内外の関連部門及び友人の皆様の支持と援助のもとで、北京大学の日本研究が、必ずや新たな、そして更なる発展を遂げるであろうことを確信しております。

主要参考文献

- (1) 王学珍、郭建荣『北京大学史料』第一巻、北京大学出版社、1993
- (2) 王学珍、郭建荣『北京大学史料』第二巻、北京大学出版社、近刊
- (3) 北京大学日本研究センター『北京大学日本研究中心科研成果目録』（1988-1993）、1993
- (4) 北京大学日本研究センター『北京大学日本学論著索引』、1993
- (5) 北京大学日本研究センター『日本学』第二、四、五輯、北京大学出版社、1990-1995
- (6) 賈蕙萱、沈仁安『中日民俗的異同和交流』、北京大学出版社、1993
- (7) 『北京外国語学院日本研究中心第二回日本学中日研討会論文集』、1991
- (8) 馬興国、崔新京『中国的日本研究雑誌歴史回顧与展望』、遼寧大学出版社、1995